

# インド留学記

その4

## チャイのある生活



司託会 研究俊坂研究東保

軽い朝食のおかげですぐにおなかがすく、そこでチャイ（ミルクティー）を飲みにゆくこととなる。

インド人のチャイ好きはつとに有名である。

このチャイは中国から入って来らしいが今で

はすっかりインドの食文化の中心に腰を据えて

いる。どんなところに行つても、このチャイだけはないところがない。そして、一年中季節を問わず人々に親しまれている。

例えば夏の暑い時期、湿度五パーセント以下

温度五〇度を越えるころでも、木蔭に腰をおろして頭の痛くなるほどに甘いこのチャイを飲む

ことは、やはり同じようにこの暑さを経験したるものでなければ解らないうまさであろう。

インドのこの時期は焼けつく太陽が、生きとし生けるものの水分を一滴のこらず絞りとつてしまふ。木々は葉を落とし、そうでない木も弱々しくただふりそぞぐ太陽光線に身をやかれるにまかせている。人間とてこれらの木々となんら

変わりはない。

身体の水分の多くは、薄いインドサラサの上

着をいとも簡単に通り抜けてゆく。従つてまつ

たく汗をかいだという感覚はない。ただ無性に



喉が乾くことで、身体中の水分が不足していることがわかるのである。しかし、ここで生水を飲んだら地獄となる。だいいち、この時期の水は水質がとくに悪く危険である。いきおい我々が水分を得ようとすればこのチャイのお世話にならねばならないのである。

はじめは、暑い時期にお茶を飲むことに少々違和感があつたが、いざ飲んでみると意外や意外、一瞬にして汗となつて玉と散るがごとくにチャイは身体の中をかけめぐり、毛穴から素早く蒸発し、その際、溜りに溜つた身体中の熱気を外に持ち出してくれる。

その一瞬の清涼感はどんな高価なクーラーも



及ばない。木蔭に腰をおろして汗をぬぐいながら飲むチャイの味わいの深さは、インドの文化のふかさにも優るとも劣らないのではないかと私はおもつている。

この庶民的飲み物であるチャイを売るチャイ屋さんがまた楽しいのである。

尻が地面につくよう座り、薄汚れた服にドーティーと呼ばれる腰巻きを巻き陽気な話をしながらチャイをいれている。このチャイ屋さんたちのほとんどは田舎から出てきた人たちである。チャイ屋は彼等の最も簡単なアルバイト的職業なのであろう。そして、恐らくこのチャイ屋ほど簡単にできる商売はないのではないかと思えるほどである、その数も大変多い。

チャイ屋はある日突然できるのである。例えば大きな木の下とか、建物の横とかちょっとした空間があれば、すかさずチャイ屋はやってくる。そもそものはずで、彼等の道具はいたつて



簡単、コンロと湯沸かし、そして水牛の乳を入れる入れ物、あとはコップを少々。これですべて。お茶は何度も使うし、砂糖はインドでは激安なのでそもそもではかかるない。場所さえみつければあとはひとのやつてくるのを待つばかりとなる。時として、まつたくひとけのない荒野にチャイ屋さんが居たりして驚かされることもある。いずれにしても、この一杯五円ほどのお茶に目がないインド人は甘いものに蟻が群がる。私のいた学生寮の中にもこのようなチャイ屋が店をだしていた。小腹のすく十時頃になると、生徒たちが三々五々集まつてくる。そこで皆思い思いにチャイを片手に議論するのである。

勿論、チャイはこのように庶民の飲み物というだけの存在ではない。ありとあらゆるところで先ず供さるるのが、このチャイなのである。

私がある用事で、ザイルシング大統領の官邸に呼ばれた時にも、やはりチャイが振る舞われた。このときはさすがに路上で飲むチャイとはことなり、インド共和国の国章であるライオンが金地に浮彫りされていた。

インドの「飲みニケーション」は日本のように酒ではなくチャイなのである。

るよう、チャイに群がつて来る。

カフェオレのような色のチャイを啜りつつ印度の味を楽しんだのが昨日のことのように思い出される。